

# 避難所到着に最長6日半!?

新潟県の東京電力柏崎刈羽原発で深刻な事故が起きた際、三十<sup>キ</sup>圏内の住民約四十五万人が圏外の避難所に到着するのは最長六日半もかかる。そんな避難シミュレーションの結果が新潟県によって公表された。ただ、これでも想定は甘く、積雪を見込みながら「除雪が終わって通行できる」という前提で計算した。県は再稼働に反対することもないが、果たして住民を守れるのか。

## 新潟県 除雪済み前提で計算

避難経路の北陸自動車道と国道8号が使えなくなると仮定すると、百五十七時間

県が十九日に示した「原子力災害時避難経路阻害要因調査」では、地震や津波の複合災害が起きた時など約四十パターンを検討。避難の問題点を洗い出した。それによると、二十<sup>キ</sup>圏

三十分ほどかかるという結果になった。避難指示が出ても、渋滞のために四日間ほどは家から外に出られず、車に乗っても約二日間、車内で過ごす計算になっている。

住民の90%が避難するとの前提に立ち、平日昼の晴れた場合の避難を見込んだところ、放射能汚染を確認するために約三十カ所に設置する「スクリーニングポイント」周辺で渋滞が発生する影響などで、七十二時間十分～百三十五時間二十分を要するとされた。

県は今後、避難時間を短縮するため、北陸道と国道8号が交差する地点にスマ

さらに、地震による道路の寸断などに伴い、主要な

8号が交差する地点にスマ

## 「実効性のない計画 再稼働ダメ」

トインターチェンジを整備することなどを国に要望するほか、スクリーニングポイントの追加などを検討していくとしている。

これに対し、「原発をなくす新潟県連絡会」事務局の小網孝志さんは、二〇〇七年の中越沖地震の経験を振り返りながら「医療支援のために柏崎市内の病院を経て、現場に行こうとしたが、大渋滞が起きていた。これに原発事故が同時に発生していたとすれば、不安は大きくなる」と吐露。新潟は豪雪地帯もあるため「冬が心配」と懸念する。

県の今回の調査でも、積雪を見立てている。だが、「除雪は避難前に完了している」と、疑問符が付く想定もしている。昨年十二月に、新潟県や群馬県の関越自動車道で二日間以上にわたり、車が立ち往生していたことが記憶に新しい。

避難計画を扱う県の検証委員会が委員を務める環境経済研究所の上岡直見代表は「だいぶ楽観的な想定に見える。ほかにもスクリー

ニングポイントで汚染した車が出た場合はどうするかなど、スムーズに行くとも限らない」と指摘。「避難の六日間でトイレや水、食糧をどう確保するのか。被ばくをいかに避けるかも検討がまだだ」と説く。

東京女子大の広瀬弘忠名誉教授（災害リスク学）は「一七年、柏崎刈羽原発の三十<sup>キ</sup>圏内の住民向けに意向調査したところ、複合災害時に八割近くが「恐らく」を含め「避難できない」と答えたという。広瀬さんは「時間がかかるといえば、住民はますます避難ができないと感じるだろう。再稼働を推進する側は、何とんでも「避難できる」と言うだろうが、住民は不可能と知っていることを知るべきだ」と唱える。

その上で「何日もかけて避難するというのは、県民の安全や不安解消につながる。実効性ある避難計画をつくることはできないのだから、再稼働しない方がいいということになる」と強調した。



東京電力柏崎刈羽原発から30<sup>キ</sup>圏内の避難手順などを確認した訓練＝13日午前、新潟県柏崎市で